

2 めざす子ども像に向けた授業実践に関する考察

(1) 授業の構想

① 本単元で求める「音楽に対する感性を働かせ、豊かな表現をめざす子どもの姿」

- ◇ 打楽器の音色の特徴を感じ取りながら音楽を聴いたり、曲想と音楽の構造などのかかわりと考えながら、音楽表現を考える姿
- ◇ 聴き取ったことや感じ取ったこと、表現の工夫などを仲間と話し合うことで、よりよい表現を見いだす姿
- ◇ 鑑賞や表現の学習経験を生かしながら、自分たちのめざす表現に向かう姿

② めざす子どもの姿を導くために

- ア 鑑賞と表現とを関連させた題材構成を仕組む。そうすることで、それぞれの活動で得た知識や技能を生かしながら、音楽表現を工夫することができるようにする。
- イ 感じ取ったことや表現の工夫などについて話し合う際は、理由を問うたり実際の音で確認したりする。そうすることで、音を根拠にししながら考えや思いを共有することができるようにする。
- ウ 子どもたちの発言を、自己のイメージや感情と音楽的要素に整理し、それらを関連付けていく。そうすることで、音楽表現を工夫し、どのように表現するかについての思いをもつことができるようにする。

(2) 学びの実際

① どんな音がするかな？【第1次の学び】

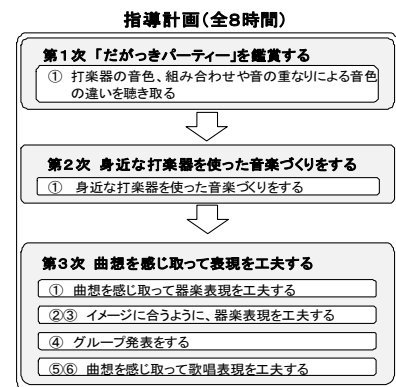
第1次では、鑑賞曲『だがつきパーティー』を扱った。どんな打楽器が使われているか、どのような音がするかを意識しながら聴くよう促し、鑑賞を行った。すると、単独の楽器で演奏される曲の部分については、子どもたちは音色の特徴を捉えることができたが、音が重なっている部分については、聴き取った音色やイメージにズレが生じた。そこで、実際に使われている楽器一つ一つの音を確認し、音が重なっている部分のイメージや音の特徴を感じ取りながら聴くよう促した。【支援イ】すると、打楽器の中でも、木・金属・皮などの素材の違いによる音色の特徴を捉えるとともに、音の重なりによって曲の感じが変わることなどに気付くことができたのである。

② 打楽器を使って、4小節の音楽をつくろう【第2次の学び】

第2次では、音楽づくりに取り組んだ。鑑賞曲を聴いて打楽器に興味をもった子どもたちに「4小節の音楽をつくろう」という課題を提示する【支援ア】と、1次で鑑賞した「だがつきパーティーのリズムを使いたい」という意見が出た。そこで、リズムに着目して鑑賞するよう促すと、子どもたちはリズムを聴き取るだけでなく「だんだん楽器が増えてきて、賑やかな感じがする」という「音の重なり」や「1小節の中で、2つの楽器が2回ずつ（交互に）鳴っている」という「よびかけとこたえ」などの音楽的要素やその面白さに気付き、それを生かした音楽づくりに取り組んでいくことができたのである。

③ かぼちゃに合う音を探そう！【第3次①～④の学び】

第3次では、最初に器楽教材『かぼちゃ』を扱った。はじめは、歌詞のとおり「おおきなかぼちゃを音で表そう」という課題を提示し、どのような音で表せばよいかを考えていった。





イメージに合う音色を探す子ども

子どもたちは「大きなかぼちゃだから、大きな音がする楽器を使えばよい」「2つの楽器を一緒に鳴らすと、大きな音になる」「音を重ねていくと、人が増えていく感じが表せる」など、鑑賞や音楽づくりの学習で得た知識を生かしながら、グループで表現を工夫していった。

次の時間には「〇〇なかぼちゃを音で表そう」という新たな課題を提示し、グループで表したいかぼちゃの様子について話し合った。その後、自分たちの表したいかぼちゃを音で表すには、どのような工夫をすればよいかを考え、自分たちのイメージするかぼちゃに合う音を探していった。

子どもたちは、イメージに合う音色の楽器を探したり、その様子に合うように音の出し方を工夫したりしていた。しかし、その表現が本当に自分たちの表したいイメージになっているか、演奏をしているときに気付くことは難しい。そこで、タブレット端末で録音し、自分たちの演奏を聴くことのできる環境を設定した。録音した音を聴いた子どもたちは「もっと弾むように叩いたら、でこぼこしたかぼちゃになるよ」「音を大きくしたり小さくしたりすると、でこぼこな感じがするよ」など、自分たちの演奏を客観的に捉え、どうすればイメージに近づく音になるかを話し合い、表現の工夫を重ねていくことができた。



自分たちの演奏を録音する子ども

『かぼちゃ』の学習の最後には、グループでの発表を行った。その際、演奏を聴いて気付いた工夫を交流するだけでなく、発表したグループに、その工夫をした理由を問うた。【支援ウ】そうすることで、演奏者の表現したいイメージと表現の工夫とを関連付けて、そのよさに気付くことができたのである。

④ 虫の鳴き声を歌で表すには、どうすればよいか？【第3次⑤⑥の学び】

次に、歌唱教材の『虫の声』を扱った。はじめに、歌詞に出てくる虫の鳴き声が、どのように表されているかを確認し、実際の虫の鳴き声を聴く活動を仕組んだ。子どもたちは、虫の鳴き声と歌詞とを結び付けながら聴き、虫の鳴き声の特徴を捉えていった。その後、虫の鳴き声に合うように、歌い方を工夫していく活動に取り組んだが、イメージしたことを声で表すことには難しさを感じていた。そこで、それぞれの虫の鳴き声の違いを表すためには、どのような歌い方の工夫ができるかについて、全体で交流した。子どもたちからは「明るい感じの声」「やさしい声」など、音色に関する工夫や、「短く切って歌う」「伸ばして歌う」など、アーティキュレーションに関する工夫などが挙げられた。【支援ウ】その後、グループに分かれて歌い方の工夫を考える活動に入った。その際、実際の虫の鳴き声を確認できる場を設けたり、タブレット端末で自分たちの歌を聴くことができる環境を整えたりすることで、子どもたちが、よりよい表現をめざしていく姿が見られたのである。

(3) 授業の考察

子どもたちは、鑑賞から表現のヒントを得て、よりよい表現になるよう工夫していく。その際、自分たちの表現を客観的に鑑賞することで、よりよい表現を追究していく姿が見られた。その点で考えると、鑑賞と表現とを関連させた題材構成での授業は、有効であった。

幼小中一貫教育に向けての連携について、今年度は表現領域の「歌唱」で授業に取り組むことしかできなかった。今後は、関連内容を整理し、カリキュラム編成や到達目標の設定など、音楽科の内容で連携していく必要があると考えている。